

社会における市民の役割～市民参画、雑感

2021. 11. 14to

0. はじめに

1. 事の経緯

最近、各自治体では中長期ビジョンの策定を行う際に、人々の幸福(wel-being)をゴールとした成長戦略を構想化している。そこでは、戦略そのものは行政側で委員会形式であっても行政主導で策定し、その後に地域民参加の道を残して市民参加を強調し、「皆さんが何ができるか」を考えて行動をしていきたいと思います、行動を促している。これは市民参加として響きよく聞こえ、市民の参加協力をいただきながら、総合的に地域一体で地方活動の営みが叶うとしている。(そうかな)

たまたま、町や県の中長期ビジョンについての説明会に出たとき、市民参加が叫ばれていても大いなる制限があるように感じた。前後して意見を聞かせと欲しいと言われたこともあって、そもそも市民参加とは何かを改めて考えてみることにした。

私(ごく普通の方々)にとっては、市民参加は当然として理解をしていたつもりでも、改めて考えてみると当たり前のこととしてわかっているものの肝心なことが忘れ気味であることを痛感した次第である。

本稿では、そうした観点で今一度、市民参加を考え直すことにした。そして、市民参加の本質が霞まないように、より充実するように、との思いをもって、ごく一般の市民としての市民参加論評とした。ぜひ最後までお付き合いください。

2 目的

市民(県民、市町村民)側視点で各種の戦略構想全体を展望してみると、*期待される市民の役割には今少し理屈づけが必要と感じた*。そこで、「**社会の主役は市民である**」という大前提のもとで、市民視点で連携、街づくり、教育、等について雑感を述べることにする。

3 ビジョンの解釈

種々の自治体が掲げるビジョンを私なりに解釈すると、広域を官が中心に産・市民の支援とともに、産・市民からの行政支援といった双方向の地域づくりとみてとれ、これを二構成として読み解きたい。すなわち、第一に県が抱えている問題について幸せを源にして社会成熟化からの戦略構成、第二に行政中心とした市民支援や産業界支援とその逆(行政へのノウハウやマンパワー)応援。ということである。

3 市民側から見た主要な問題

行政の抱える多くの問題がある中で市民側から次の三問題が気にかかる。すなわち、市町村消滅危機回避、自然保護と観光のバランス、行政への市民の声の反映。(今回はこれに限定)

それらは結局のところ、「社会における市民の役割

を問うものであり、「暮らしからの地域(街)づくり」や「市民の社会参画」の問題である。

I. 市民の参画・交流からの社会参画

1. 官産学民連携

官は民との連携(産業・学府・市民)を重要視し、行政事業には産業界のノウハウや学術界の学識を反映させるとしているが、市民には市民自身の問題としての対処の活力を期待している。それもそうだが、**官が取り込むべきは市民感覚と市民良識**である。

2. 市民参画、連携は主体的参画へ

一般に産学、各市町村、市民との対話を含めて連携が強調されており、市民連携は市民の主体的参画行動につながっている。具体的には、市民が行政からの単なる意見提出に終わることなく、**市民側から湧き上がる事づくりを専門家(行政含む)と市民とで練り上げていく姿勢が必要**と考える。この練り上げが、市民の事へのかかわり向上や専門家の専門行為への市民視点からの補完(事づくり)を可能にする、といいたい。

3. 市民の声の反映

行政の市民向けプロジェクトについて、プロジェクト企画段階と実施段階とにおいて市民参入・市民参加が考えられ、前者については神奈川県大和市において一時期に例を見るにとどまり、市民参加とは後者をさすことになる。今の市民参加では形(企画)がすでに出来上がっていて、市民の声が真に反映されようがない。市民は実施段階においてプロジェクト側支援に加わることやプロジェクトの恩恵を受けることがあっても、主体的参加による充実を得ることはできない。

4. 連携は交流拡大と関係深化

連携のメリットは関わる方々の交流や関係を深めることでもある。交流といった場合、関係深化は当たり前前としているが、関わる方々の信頼関係が深まることをあえていいたい。官民連携ならば両者の間には**信頼が必要**ということはいうまでもない。

5. 地域内外の往来、背負う地域遺産が滲み出る

官産学民の幅広い交流として、県内外や県内の地域内外における交流。交流する方々は文化や歴史を背負っている歴史や文化を滲みだしてもいるので、文化や歴史の伝搬に加えて技術や知識の県内での共有化が結果的に図れる。

6. システム改善にもつながる組織内外の往来

縦割り行政の改善が叫ばれる今日、システムが変わらない(変えれない)なら、システムを運用か利用活用の人側を変えるしかない。その意味で、人の集積や出入りといった人の往来を第一歩としていくべきかと考える。

II. 市民側からも社会意識づくり

1. 理念理想；

SDGs が評価される一番の理由は(人類の)理想先行にあり。今の世の中では、データ重視・予測先行が重きをなすので、人間本来の理想を築き上げることの土壌が育たず。これからは今までの動きと共に理想進行も考えれば、次の時代をつくる情念が沸き上がっていくことであろう。今後は、**モノづくりから事づくりへ、さらに考えづくり**になるのでは。

2. 社会良識づくり、市民の声は常日頃から発す

市民の声の反映をプロジェクト策定に際して求めてもらちがあかなければ取りうる方法はひとつ。**常日頃から市民が声を発し、市民感覚を社会に定着させる**かのようにすることである。これは開明的な方が世の中を先導する世論とは違って、市民意識で社会意識を形成させることをいう。こうした考えは地域に根差した地域に住むすべての人(官産学民)による地域特有の共同体意識であり、これこそが社会のwel-beingであり、誇りたいものである。

3. 教育

・学校教育は別にして地域づくりにおける教育という人材教育をいうが、これとは別に地域を形成する市民の間での教育をあげたい。これは教育いうよりも暮らしの中での学びと教えであり、例えば子供時代の遊びは学びというあたり前のことをしっかりと考えたものである。理由は人間形成にはかかせないからである。これが地域の人的環境を構成するものであり、地域の良識の源となっている。

・人材教育は組織において活躍できるように能力を磨くものであり、会社人材、役所人材など育成のための教育である。要は間に合う人間育てということで、組織内の実務に関するスキル教育が主になりがちであり、どうしても目的遂行の教育となり、科学、技術、情報、経済、芸術(これはとってつけたように思う)などが主となる。しかし、そうした技術教育では総合力のある人材が育ちにくく、教養教育を施すべきと考え、文学、哲学、芸術などの教育が必要である。なお、理学や工学や社会系でも目的に特化しない理念的体系は教養そのものであることを付け加えておく。

・教育は人づくりといわれている。そうして育った人の持つ能力や素養とは何か。仕事を進める専門的な思

想や技術はいうに及ばないが、本来は博識・見識・良識を身に着けることではないのか。社会そのものにもかねそなわる博識・見識・良識を磨き上げていくべきと考える。そうしたところに、自由平等博愛といった基本理念があり、また批判精神やチャレンジ精神などが育まれていくと考える。

III. 暮らしからのアプローチ

1. 街づくり

人の暮らしの場が街であり、街をよくするよう日々努力することが街づくりである。街において、人の長年の営みの積み上げが歴史であり文化である。大事なものは、その過程であり、結果ではない。街は、息づいた暮らしそのものとして人と街が一体になっていることはいうまでもない。**街は人が往来し、話し声で賑わう場なのである。**

一つのアプローチとして例の紹介。おおかみこどもの花の家では静寂な自然環境と集まる方々のさわやかな人間性により、訪れる方々が至福のひと時を過ごすのである。スタッフの方は、来訪者にはご自宅をおかみの家と同じような気持ちで過ごして下さいとお話しされている。家、街、地域での過ごし方とはそんなことをいうのである。付け加えるなら、居心地とは暮らしを楽しむ姿勢のこと、といっておきたい。

2. 幸福

以上のことが叶えば、成熟社会にむけて具体化で着実な成果の積み重ねとなり、それこそすべての方々が幸せとなり幸せの向上となって、「社会の主役は市民である」ことを喜びとすることができるのである。さすれば、地方において、皆さん顔の見える暮らしが可能となり、他の地域の模範となって胸を張れるかと思う。wel-being とはそうしたものといいたい。

3. 暮らしと幸せ、まとめとして

真の幸せは健全な暮らしに宿る。その暮らしとは、健全な人的社会的環境での営みであり、特に社会的環境では営みを市民でつくり上げ、また成果を市民が享受するのである。人は社会をつくり、社会は人をつくる(育てる)のである。それには、市民がこれまで培ってきたコミュニティを継承発展させる。そのバックボーンが市民感覚の博識・良識・見識である。

IV. おわりに

市民参加を身にあるものにするために、市民の存在となにか、市民力育成をどうしていくのか、について、「暮らしの健全化イコール社会の健全化」の考えで、市民が主役で営む諸々を述べた。これをもって、「社会の主役は市民」として成熟社会を迎えたいと考えている。謝辞;多くの方々には議論でお世話になった。感謝いたします。